

【実践報告】

教育実習V・VI（中・高）の報告

広島文教大学教育学部

教育学科 教授 黒木 晶子 教授 笹原 豊造 准教授 猪川 優子

1 はじめに

教育実習V・VIは中学校・高等学校教員としての適性を確認し、その資質を伸長するために行われるものである。大学で学んだ理論と教育現場での実践がどのように関連するかを実習で学ぶ。実習校で指導担当教諭の指導のもと、授業参観、教材研究、授業実施、学級指導等を行う。

2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
事前学修 (学内)	4月～5月	・本実習の意義、目的、心構え等を再確認する。 ・実習校への事前訪問により、指導担当教諭等の指導担当者に、担当となる学級の生徒の実態や、指導計画、担当授業の内容を確認する。 ・教材研究、模擬授業を行う。担当教員による指導、実習生相互の検討作業を通して、よりよい教材・授業になるよう工夫を重ねる。
本実習 15日間 (学外)	5月～6月	・実習の内容は実習校により計画される。主な内容として、①指導担当教諭等からのオリエンテーション、②授業参観、③教材研究、④授業担当、⑤生徒指導、⑥その他の学校・学級運営に関わる諸業務が挙げられる。 ・実習中は教育実習日誌等の記録をつけ、中学校・高等学校教員の役割・業務等について理解を深める。
事後学修 (学内)	7月 報告会は 7/26に実施	・各自の実習を振り返り、報告書をまとめる。 ・各自の実習内容について報告会で報告する。報告会では、教科指導、生徒指導、校務等を通して学んだことを発表する。

3 活動の概要

○教育実習を通して学んだこと（学生の報告会資料より抜粋）

- ・小学校、中学校ともに実習をさせていただき、それぞれの学校文化の違いや義務教育について改めて考えることができた。これからの社会をつくる児童・生徒にどのような資質・能力を身につけさせなければならないのか、社会の変化の中でしっかり見極めながら、義務教育を通して育成しなければならないと思った。教育の不易と流行の双方を大切に、私自身、外柔内剛で魅力的な教師になりたいと強く思った。
- ・私はこれまで一つの小説にこんなにも深く入り込んだことはない。本文に向き合い授業を考えるとこのことなのだと感じた。また、単に国語が好きだからという理由だけではできない仕事で

あると実感した。授業を行いながら、生徒たちから出る多様な考えに感動したと同時に、この素晴らしい考えを授業にうまく生かせない自分が情けなく思うこともあった。生徒主体の授業づくりができるよう、今回の実習で学んだことを生かしていきたい。

- ・中学校での教育実習を通して生徒との信頼関係づくりの大切さと専門性の必要性を学んだ。信頼関係ができていなければ、教科指導や日々の指導で生徒が素直に受け入れることができなかつたり、悩みを打ち明けることができなかつたりする。生徒一人一人と積極的に粘り強くかかわっていくことが大切だと感じた。また、確かな英語力を身につけ、教師が積極的に英語を使うことが大切だと感じた。これから単語力や英会話力をもっと身につけていきたいと考える。
- ・先生方は、休憩時間もせわしなく働かれていて、毎日山のような仕事を抱えておられた。クラブ指導や出張で自分の時間などないようなも感じた。しかし、生徒との関わりは本当にかけがえのないものだった。最終日にもらった手紙の中に、「詩の時間に『思ったままでいいよ』と真っすぐ目を見て言ってくださったので安心して詩を完成させることが出来ました」という言葉があった。私は、このことから生徒にとっては、一時間しかない授業であり実習生など関係なく一人の先生なのだと再確認した。生徒たちにもらった言葉を頭において教職につけるよう努力していきたい。

4 成果と課題

当実習は、大学での学び（理論）と現場での学び（実践）をつなぐものであり、教育法Ⅰ～Ⅳを学修してきた学生たちにとって集大成としての意味をもつものであった。すでに前年度小学校での本実習を終えている実習生も多く、その場合、小学校と中学校との相違点や共通点を実感する場でもあった。担当教科の授業に加えて道徳の授業を担当した実習生もおり、深い学びを得る機会となっていた。

教科の指導に関しては、教材研究の重要性を改めて認識した実習生が多かった。授業を実施するには深い教材理解と多角的な教材分析が必要である。大学で学んだ方法論を土台にして、担当教員から多くの教えを受けながら授業を組み立てていった様子が、巡回指導でうかがえた。

生徒指導や校務に関しては、現場の教員の多忙さを実感した実習生が多かった。また、教員間で生徒の情報を共有することの重要性や教員としての達成感、教員であることの責任感を実習の中で感じ取っており、様々な角度から教員の仕事を捉えることとなった。

実習報告会は、例年通りユニバーサルパスポートや授業等を通じて他学年の学生にも周知し、多くの学生の参加があった。特に3年生の積極的な参加が見られ、活発な質疑応答が行われた。

今後の課題としては、実習に向けた取り組みのさらなる充実が挙げられる。教材研究や模擬授業等、実習を視野に入れた学修をすすめていきたい。平成29年に次期学習指導要領が告示され、実習の場でも「主体的・対話的で深い学び」が模索されていた。新しい教育の方向性を見据えた学修を、学内での事前学修に取り入れていきたい。また、今後さらに実習報告会への1～2年生の参加を促し、実習に向けた系統的学修の充実を図りたい。